

企業等に振り向けるというやり方に自らブレーキをかけられない状況にあるのかもしれませんが。少し前の東京五輪もそうでしたし、フェアじゃないやり方で税金をたくさんかすめ取る面々が暗躍しました。なぜこの話題を持ち出すかといえば、これが教育の現状と深く結びついていると考えるからです。

「共喰い資本主義」の矛盾

社会学者のナンシー・フレーザー^(※)は、現在の資本主義は歴史上4つめの姿となって私たちの社会を成り立たせ人間と自然を貪り食っていると指摘します。いままさに「共喰い資本主義」という名の金融資本主義が跋扈しているのです。賃労働をめぐる伝統的な搾取だけでなく、その労働から特定の人々を排除したり自然を都合よく食い尽くしたりすることを資本主義社会は繰り返してきました。冷静に資本主義を洞察する経済学者は、早々に「資本主義の終焉」を看破しています。が、経済原理では理解不能であっても、社会秩序としての資本主義は「ウロボロスの怪物」と化し、自然資源だけではなく、ケア労働を中心にした社会的再生産という営みを私的領域として収奪し、さらに非正規雇用の労働市場へと参入させつつ安く買い叩くことになります。

その再生産労働のひとつが教育なのです。交換価値を利潤として蓄積し、余剰価値を生み出させる資本主義社会を維持するために、教育は社会的再生産の主要な役割を担っています。しかしながら、直接的な生産労働ではないケア労働は、歴史的に私的領域に押し込められていたこともあって、貶められた価値づけしかなされてきませんでした。搾取や収奪に手を染めず、資源や権力をめぐる戦いから距離をとるには（つまり、いっしょに生きていくためには）何をすればよいか…という順番で考えれば、私たちの社会がいかに歪んだ論理と道徳律に支配されているかがわかります。

私たちに当然のごとく突き付けられる「選択肢」の正当性自体をまずは見極めることが重要な時代になっています。たとえば、「米軍基地を辺野古につくらなければ、他国に攻め入られて従属国になるぞ！」と脅しをかけるように、権力は第三項を見えなくさせるのです。立ち止まって当事者の声に耳を傾け、自分自身のいたらなさを感じ入りながら、それでもいっしょに生きていく方向を向いていくこと

…とは真逆です。しかし、「この方向しかない」と思われていることが（とくにこの国において）いかに多いかを痛感します。

「教職の危機」をめぐるでも、こうした罠にいつのまにか陥ってしまうことが少なくありません。たとえば、教員の資質能力をめぐる議論は、常になんらかの欠如を教員の側に想定することで、問いそのものの不条理さを見えなくさせます。教員の働き方改革で時間をひねり出せば何とかなる…という誤ったマネジアリズム（経営管理主義）の思想も依然として強力です。真面目で従順で少し視野の狭い教員ほどこの罠に陥ることになります。最もこの点で切実さを抱えているのが若者たちかもしれません。困難な時代状況をふまえ、まずは未来の教員社会をつむぐ若者の言葉から「危機の本質」を抉り出すことから始めたい…そのような思いをもって、教職の危機についてのプロジェクトチームを組んで研究に着手しました（前号にて頭出し）。

『教職を離れる若者たち』からのメッセージ

報告書『教職を離れる若者たち』は、こうした社会認識にもとづいた議論をベースに企画され、（教育実践を大事にしてきた教育研究者の皆さんと協働的に企画・実施した）インタビュー調査データの分析結果にもとづいています。対象は、全国の7つの四年制大学で教職課程を履修した4年生です。普段当該学生とかかわる中で「この学生さんは教員になるにふさわしい」とする教員の期待とは異なり、あえて別の道を選択した若者たちです。かれらの目に「教職」がどのように映っており、なぜいったんは教職を強く志し教育実習を経験したにもかかわらず初期の思いとは異なる進路を選んだのか。かれらの言葉から「教職の危機」の本質を探り、課題対応へのヒントを拾い出していくことを狙いとして実施された新しいタイプの質的調査です。一人ひとりの言葉の肌理を含めて感じ取っていただくことを大切にしたいと考え、教育総研のウェブページには研究者による「過度の要約」を控えた報告書として掲載させていただいております。現物をお読みいただくのがベストですが、あえて要約するとすれば、以下の5点になるでしょうか。

第一に、かれらは教育実習を通して学校のリアルを経験することをきっかけとして、教職に就くこと